

目的 高齢者の着衣も既製服の占める割合が高くなり、今後急ピッチで進む高齢化社会に備え、高齢者に望まれる快適な被服の開発が急がれる。その一助となることを目的に、高齢者が戸外で着用している最外衣の服種のデザインを3期に分けて観察・分析した。秋冬については昨年の41回大会で、春については家政学会中部支部35回総会で報告したが、本報では夏および3期全体を概観した結果を報告する。

方法 ①高齢者が参集する名古屋市内の寺を中心に、高齢者の歩行時の状態を無作為に写真に撮り、それを分析の資料とした。サンプル数は、男605名、女609名である。②調査時期は、1989年7～8月の晴天の日を選び、10時～14時までの間に資料を採取した。③デザインの分析は、最外衣の服種、えりおよびそでの種類、着脱のためのあきの位置および留具、柄の有無および色、服飾品などである。

結果 ①男子の服種は99.2%をシャツとズボンの組合わせで占めた。シャツのあきは前全開と途中あきに大別され、前者は55.7%、後者は44.3%であった。えりは6種出現し、前全開ではシャツカラー55.4%、オープンカラー44.3%、途中あきではシャツカラー42.1%、ステンカラー27.8%、ウィングカラー22.6%であった。色は白が多かった。②女子の服種はワンピースが53.7%、次いでブラウスとスカートが28.4%であった。ワンピースのデザインは、えりは「なし」が61.5%、次いでオープンカラーが21.4%で、あきはウエストラインより下の途中あきでボタン止めのものが71.6%、デザイン柄が84.7%、色は2・3色づかいのものが多かった。ブラウスもえりのないものが42.4%出現した。